

# 幼児前期の対象活動の意義

——とくに事物認識と技能習得について ②——



平岡節

## 五 対象活動の発展の要因

ここで、いままでみてきた対象活動は何によって発展しているのかを考えてみたい。これを明確に把握することは、その教育に計画性をあたえるために重要なことであると考えらるからである。

人間の新生児は身体機能の人間性からみると不完全な姿で生れている。その出生は脳組織体を基準にしていると、スイスの動物学者ホルトマン(10)はいっている。つまり、脳組織体は一応人間になることができるだけの要素を備えながら、その機能は未開発の状態が生れている。したがって、一般高等哺乳動物の新生児の法則からみると人間は未熟児として生れている。

前記の対象活動の全体系をみると、この未開発な脳組織体の機能を開發させ、身体機能を人間的にするために、対象活動を行なっ

いと考える。人間的能力とは、多くの文化遺産をうけつぐだけではなく、それをさらに發展させることができる能力のことである。

それは多くの可能性をのこしたまま母胎外に出て、人間世界で直接人と物に交渉をもち、直立姿勢・コトバの習得・思考的行動(手の活動も含む)など人間的諸能力を学習していく過程でもある。つまり、人間世界の特殊な刺激と自己の努力によって人間になつていくと考えられる。

したがって、対象活動の發展は

- 1 個体内部の組織体に基礎をおき
- 2 外部(社会)の条件としての人と物のほたらきかけと
- 3 それに対応する自己活動

の三要素によつて行なわれている。しかも、この各要素間の相互作用によつて發展している。つまり、外部刺激が主体に反映し、さらに主体の反

応によって対象活動は発展している。その過程で組織体自体を發展させ、身体的・精神的諸機能を形成していると考えられる。

ここで、私の疑問というか、まだ明確な結論に達することができないでいる一つの問題が残っている。それは「成熟」である。

この成熟は一つの發展現象であると考ええる。發展は主体の内部条件と外部条件の相互作用であると考え、しかも内部条件は外部条件によって変化し、外部条件は内部条件によって変化させることができる。

しかし、この成熟に関する内部条件のうち、外部条件の如何にかかわらず決定的なものと、外部条件によって変化するものがあるように思われてならない。とくに幼児前期の場合にそれが考えられる。その前者に属するものは、内部条件というより「發達の源泉」(ザンコフ)と考えた方が正しいのかもしれない。その一つをあげれば、前に記した生後三カ月頃いろいろと働きかけてみたにもかかわらず、手の接触運動の開發はみられなかった。それは神経纖維の髓鞘化の未完成にある(3)といわれる。また、ワロンも運動行為の生理的仕組みについて述べているなかで「中枢の機能的成熟」の必要をみとめている(5、二四四頁)

しかし、一方以前(戦前)の新生児はその殆んどが手の指を握っており、開くことができるようになるまでに相当の時間を要した。ところが、最近では殆んど出生時すでに指を開いている。これについて、母体自体の向上と胎内の栄養とに基因するという仮説がある。

(「赤ちゃんの日課」)この仮説の上に立って「成熟」を考えるならば、それは外部条件(栄養その他)によって変化するという結論に導かれる。

しかし、前記のようにそこには順次性と大まかな時期があるように思われる。

人間は複雑な存在である。この複雑さは、長い歴史的發展の過程でさすき上げられたものであると考えられている。

したがって、その成熟の順次性と速度も、このながい時間をかけてつくられたと考えるのはまちがいであろうか。この複雑さに対するあらゆる条件は有機的に関連している。その多くの条件の何かが、とびぬけて優れていても、欠けていても円満な成長は期待できない。というより、むしろ問題(身体的・精神的)を残すように思われる。例えば、最近起立性調節障害の原因の一つとして、子どもの身長・体重の成長に対し心臓および血管系の發育のアンバランスが考えられている。(「起立性調節障害」小児起立性調節障害研究班編)

しかし、人間は環境のみでなく、自分自身に対しても科学的にいどみ、それを變革發展させつつある。ただ、その複雑さに対し、現代科学の状況下(外部条件)では、これを一挙に變革することは不可能事であろう。したがって現代では未熟児として生れている人間の成熟の順次性と大まかな速度は現代の事実として先ず認めていかなければならないと考える。ここに教育の系統性が主張される一つの理由があると考ええる。しかしその人間的成熟のためには人間的外

部条件を絶対必要とし、その内容（広義の教育）によって成熟の質は左右される。つまり、新生児としてすでにもっている組織体のそれぞれの要素が、人間的にどれほどよく充実され、ヨリ完全なヨリすぐれた状態になるかは外部の条件に依存していると考えられる。

☆

そこで対象活動の発展の要因を、外部条件、つまり社会条件としての人と物の働きかけと、それに対する組織体としての子どもの反応の関係について考えてみる。

### ● 周囲の事物の条件

#### イ 事物の質と量

先ず対象活動の主体である子どもの生活空間にある事物の多様性・豊富性が必要条件である。

#### ロ 場と時間の質と量

次いで事物に対する活動を可能にするための場と時間の質量が問題である。このうち場の質が関係することは、すでにのべた対象活動の全体系の説明のなかで明確になっている。そこで時間の質量について少し説明を加えてみる。子どもの日課は、子どもの要求と周囲の人々、とくに母親自体の要求や社会的制約などからくる活動との間におこる諸矛盾の統一のあり方によってきまってくる。何れか一方に偏している場合、つまり母親の要求に偏する場合の子どもの

側の矛盾、子どもの要求に偏する場合に母親の感ずる矛盾は相互に影響し合い、互いに安定感をもち得ない。つまり時間的量の如何にかかわらず、その質は相異なる。それを対象活動にあてはめて説明すると、子どもがねむい時、あるいは遊びにあきた時に母親その他の人々の都合で遊ぶことを要求される場合などは、時間的質として対象活動の発展は期待できない。この逆の場合もある。つまり、子どもと周囲の間の諸矛盾がよく統一された時間が、発展に役立つ時間となる（したがって時間の条件は次項に入れて考えることもできる）。

### ● 周囲の人々の条件

#### イ 人々が示す対象活動様式の質と量

これは二種に分けて考えることができる。その一つは人々自身が日常生活のなかで行なっている事物を扱う様式である。もう一つは人々が子どものために、あるいは遊び相手となつてする対象活動である。

前者の周囲の人々の対象活動の多様性・豊富性によって、子どもはその模倣活動をし、その過程で文化的諸事物の機能と操作技能を学び、これを受け継ぐことをしている。

後者は子どもの対象活動を開発し、身体的諸機能の発達をうながしている。例えば極く初期にはコトバを伴いながら目の上で白布を動かし、動的玩具・発音玩具を吊す（△）。また坐座が確立すれば手の活動圏内に玩具を近づけたりなどする。これらの交渉は人間関係

を知る契機となり、人が側にいることに快感を覚えている(A)。さらにそれは複雑化し自己の動作に対し周囲の人の反応を期待し、やがてものまね、やりとり、説明的発声がみられるようになっていく(A)。

またこの種の周囲の人々との交渉は認識と技能習得の助けとなっている。認識についての一例をあげると、四カ月頃いつもベッドの側にあつた二つの相似形の事物をみせながら、「同じね同じね」といつていた。ところが坐って一人遊びをするようになった頃多くの空ビンのなかから同形のものを選出し「ね、ね、ね」と示すようになったという報告がある(A)。その他多くの個人的あるいは一般的事例はすでに述べた。

#### ロ 子どもの対象活動に対して人々が示す反応の質と量

これは主として人々が示すコトバ、表情、行動である。子どもは、自身で活動の結果について何らかの意識をもち、それによって対象の認識と技能を發展させている。がそれに加えて周囲の人々が示す子どもの対象活動への反応の質量はその意識の内容を變化、發展させるのに大きな影響を与えている。この周囲の人々の示す反応(コトバ、表情、行動など)は多くの場合、感情的に偏しているようである。もしこの時対象についての認識を深めるヨリ客観的な反応を示す(教育)ならば、子どもの認識に發展的影響を与えるのではないかと考えられる。対象についての操作、あるいは空間探究的活動期にある数量的活動(第一表参照)に対する場合、とくにそのこと

を感じる。

その好例を示すならば、子どもを高く差し上げながら「高い高い」という。それと同様にスベリ台に登ったとき、下から「高い高い、高いね」など子どもの実感に即し言語表現をきかせる。やがて、それは比較へ發展し幼児後期になれば、子どもと教師の間で「先生より高い」それに対して「○○ちゃんの方が高い」とか「先生の方が低い」と会話を交すなかで、高低の關係認識はコトハによつて、ヨリ意識化する。

#### ● 自己の反応

内部刺激と外部刺激は、要求あるいは意欲となる、対象活動はその解決法の一つである。したがつて、その過程で各感覚作用、姿勢、思考などの協働を助け諸機能、能力を發展させている。(5二四五—二四九頁)その結果、彼らの対象活動自体をも高めている。例をあげてみると、身体移動のできない頃は対象獲得の意思を手と発声で表現し、起立のまま「アア」と手だけ伸ばして人に訴え目的を達成している。ところが、やがて起立の姿勢から一度腰を落してにじりよることを覚え、あるいは思わず二、三步あるき出すなどがみられる。これらは、対象獲得の要求解決であり、身体機能を高め、また思考は意欲と結びついて実践的次元で發達している。また水がほしい時、水を入れる動作をし、絵本を読んでほしい時、母親の口を引っ張り絵本を叩く(A)など自己の要求表現を身振語によ

って行なっている。

これらの身振語は感情の分化と結びつき、自己の対象活動の過程で得た操作技能の再生であり、対象の機能理解と並行している。また、五カ月中旬頃玩具を手当り次第擱んでいたのが、下旬には同一玩具をよるこばなくなり、一度手にもって後それをはなし他のものと取り替える。これは自己の要求（内部刺激）により対象（外部刺激）を選択（内・外の刺激の矛盾の解決）するようになったことを意味する。と同時に触覚運動的対象認識である。また同一児が八カ月下旬頃黙々と箱を叩いて遊んでいたのが、九カ月下旬になると玩具箱から発音玩具を選出して遊び、やがて十一カ月頃言語的発声を伴いながら叩いて遊ぶなど内部刺激による要求は対象活動を発展させる。一方、各機能、及び認識・技能を深め高めている。

以上のように、対象活動の発展は自己の内部条件と外部条件の相互作用によって行なわれている。私は前に「契機がある」とたびたび述べた。それはこの二つの条件に依存していると考ええる。

また対象活動の過程で認識と技能を高めたことは、すでに述べた事実のなかに明白になっている。したがって、対象活動の発展の要因は同時に認識と技能習得の発展の要因となる。

## 六 事物認識と技能習得の法則性

前記（四）の対象活動の体系は、本調査見と、その社会的条件下での経過を整理したものである。しかし、これについて一般性を検

討するために冒頭にかかげた文献を参考にした。それは大体近似の結果をえていると思う。

そこで、これを基礎に、先ず認識と習得する技能自体の発展のあとをさぐり、前項（五）との関係で、そのなかにある法則性をみいだしたい。

### ☆

そのそれぞれを明確に把握する目的で、対象活動の全体系を要約してみると第二表のようになる。表中の数字挿入のところに説明を加えてみる。

1 この過程は対象に向かう子どもの態度の変化過程である。つまり、その初期にみる機能アソビ的活動から、次第に精神的活動が増加し、対象への意識性は高度化している。この機能アソビ的活動から予測的活動への過程は、この時期のみに限られたものではなく、子どもにとって新しい対象、あるいは操作様式が新しいものに向かう時は常にこの過程をたどる。ただその速度は次第に短縮されるように思われる。

1' すでに習得した諸能力を実践する過程をみると、初期はそこに物があるからという衝動的受動的利用である。が次第に自己の要求に適当なものを選択するようになり、その利用法は目的性があり創造的利用に向かう。この創造性とは目的達成（生活経験の再現）への努力のなかにみる問題解決を意味する。また一方現象的象徴的

第二表

|         |  |  |
|---------|--|--|
|         | 1 ——— 24   | 25 ——— 36  |
|         | 基礎能力習得期  | 思考的利用期   |
| 生活形態    | ア  | ソ  |
|         | 探 索  | 模 倣 <sup>2</sup> <造 形><br>(初期的役割遊び)                                    |
| 対象活動の変化 | 3 体と物を自由にする<br><br>(事物に対する自己の優位性の自覚)                   | 3' 体と物を支配する <sup>2'</sup> <変 革><br><br>(人間的自己の意識)                      |
|         | 1 機能アソビ的→対象の意識<br>→試行錯誤的→結果の意識<br>→予測的(自己の活動と結果の関係の意識) | 1' 衝動的 利用→ 目的性<計画性><br>受動的 利用→ 創造的利用<br>現象的 利用→ 因果關係的<br>象徴的 利用→ 機能的利用 |

註 < > 新しい傾向としてあらわれつつあるもの

利用から因果關係的・機能理解に立つた利用へ向かうことはすでに述べた通りである。この1'の過程も1と同様対象に対する意識性は高度化している。しかもその意識性は1から1'へと連続的に發展している。

2・2' 造形活動はこの頃をはじめてあらわれるものではない。造形を広義に解すれば対象獲得活動以来続いている。しかしそれは操作技能を主体にしていると考ええる。がこの頃の造形というのは物の

形をいろいろつくり出すことを主目的にした活動である。それは砂で山をつくる、ハサミで切る、白紙に色をぬるなどをさす。それはすでに述べたように媒材を用いて、環境を変革することを示す。と同時に、これは肉体としての限界と身体構造からくる限界をのりこえ拡大する方向を示すものである。つまり、この媒材を用いての造形活動は自己の体と物を変化させることにも通ずる。

3・3' この体と物を自由すること、体と物を支配すること、及び加工活動はともに、異質のものではなく、体と物の変革・發展への活動の連続的過程であると考える。つまり対象活動は低次なものから高次なものへ人間的主体性を發展させる重要な役割をもっている。

☆

ここで、認識と技能をどう考えるかについて、私自身の考えを明らかにしておかなければならない。

認識は対象に対する主体の内面的運動であり、技能は対象に対する主体の身体的現象的運動であると考ええる。つまり、認識と技能は対象に対する主体の運動の二側面であると考ええる。これはまちがいであろうか。

また、認識と技能の基礎は感覚であると考ええる。それは「感覚には二つの領域があり……その一つは身体そのものの感覚の領域であり、他は外界との關係の領域……である」(5 八六頁)その感覚は

<幼児前期の対象活動の意義>

「適切な動作によって再生されるときにのみ保持され、弁別される」(同 二四六頁) この適切な動作とは身体的運動である。つまり、感覚は身体的運動と結びついて明確化する。これはまた結果的に対象を知覚することになると考える。この知覚は「感覚であるとともに、活動である」(5 八八頁) いかえると、知覚は感覚の内面的運動であると考えられる。感覚に対応した動作は「効果の法則」(ソールダイクの用語) に従って発展する。これが対象に対する技能となり、また知覚は認識の最も低次なものであり、感覚と身体的運動の関係と同様の法則により認識を次第に高めていく。しかも感覚は、それに対応する動作(技能)によって明確化するのであるから、知覚も結果的に明確になる。これは循環反応(ホルドウィンの用語)により動作の動機となり、くりかえされる。(機能アソビ的活動となる) したがって、認識と技能は相互関係にあるということになる。

つまり、この二つの運動は相互に影響しながら、結果は更新されつつ蓄積されていく。いわば主体の財産である。私ははじめに運動の二側面といったが厳密に言えば「認識と技能はともに感覚に基礎をおき、一方は対象に対する主体の内面的運動の結果であり、他方はその外面的運動の結果である。しかもそれらは相互に影響し合う関係にある」といった方がむしろ正しいと考える。結局、これらは対象活動の結果の二側面であるということに導かれる。

☆ 認識と技能に対する以上のような考え方の上に立って、第二表か

第三表

|        |              | 1 — 24                  | 25 — 36   |
|--------|--------------|-------------------------|---|
|        |              | 基礎能力習得期                 | 思考的(利用)期  |
| 技<br>能 | 一次的<br>(一次的) | 低次<br>操作様式の多様性          | 高次<br>操作様式の複合化<br>(操作の無意識化)   |
|        | 二次的<br>(二次的) | 操作目的・方法の意識化             | 媒材使用(→加工)<br>(新様式習得)  |
| 認<br>識 | 一次的<br>(一次的) | 主観的特性理解                 | 関係・機能理解<br>(→科学性=客観化)   |
|        | 二次的<br>(二次的) | 単位としての部分理解<br>触覚運動的数量理解 | 色・形の美的理解<br>(→芸術性=主観化)<br>形の名称<br>(→科学性=客観化)<br>固有名詞の色名<br>(→科学性=一般化) |
| 思<br>考 |              | 具体的 → 抽象的 → (客観化)       | (→ 一般化)   |

註 (→○○) ○○に連続的に発展することを示す

ら認識と技能習得の関係を考察し、さらにそれぞれの発展の内容とその内容相互の関係をみることにする。(第三表参照)

これは、四の対象活動の全体系の各項に事実とその解釈をかなり詳細に述べたつもりである。したがって、ここではそれを思い浮かべながら、簡単に説明することにする。

## ● 技能と認識の一次性・二次性

註 一次性と二次性の関係とは、対象活動の過程で習得される

主となるものと従となるものの関係をいうことにする。

第二表に示したように対象活動は、まず機能アソビ的活動から次第に発展している。それは対象操作の基本的様式（掴む・はなす）から次第に多様化している。その過程で触覚運動を主体に視聴覚運動の協応により、対象の諸特性を漠然と知りはじめている。つまり、この頃の対象活動は技能習得を一次的に、認識は二次的にしていると考えられる。

次いで、思考の利用期になると、アソビのなかにいろいろな事物を利用するようになっていく。その思考の利用は、思考の充実に準じており、自己の認識に従属させた活動である。この過程にみる手の活動は次第に無意識的になり、しかもそれ以前に習得した各操作様式を複合している。つまり、この期になると、対象活動のなかで認識が一次性をとり、技能的活動は二次性をとっているとみる。

## ● 技能の一次性・二次性

習得する技能の発展をみる。

第二表の1の過程をみると、最初自己の身体の諸機能を試めすように、またその結果をみとどけている。その過程で操作様式を多様化させている。

またこの過程で諸操作方法の意識性が変化している。つまり、最

初の機能的アソビ活動では操作目的・方法は無意識的である。が試行錯誤的活動からその結果をみとどけ、やがて予測的活動をはじめ、この過程で操作目的・方法についての意識性は、きわめて低次であるが次第に高まりつつある。それは操作方法の慎重さ、操作の成功とともにホッととして大きなためいきをつく様子などうかがうことができる。つまり、技能はやや技術化していることになる。しかしこの頃は思考の低さと認識の不完全さからみ合って方法は充分意識化されない。したがって、基礎能力習得期の技能は操作様式の多様化を一次的に、操作目的・方法の意識化は極めて低次であり二次的であると考える。

ところが、思考の利用期になると、操作様式をいろいろな組合せてのアソビに専念している。これは習得した操作方法の無意識化を意味している。しかし、そのなかで各操作様式は次第に高められている。一方、造形・加工など新しい高度な技能習得がはじめられている。しかも、それらは周囲の人々の提案・協力によりはじめられ、機能アソビ的活動に後退している。しかし、活動の結果に対する意識は高度である。つまり、この期の対象活動での技能は操作様式の複合化（方法の無意化）を一次的に、媒材使用の技能習得は二次的になっている。

以上が技能自体の発展過程である。つまり、最初は知覚運動的的技能習得であり、次いでその高度化とあらたに思考的技能習得へと進んでいる。いいかえると「操作方法の意識性のない技能から、意識



化の過程をたどり目的達成への手段の意識化による技術性をみせ、さらに行動様式の習慣化によってもう一度より高い技能に転化する」という法則性がみられる。(技能と技術の区別は前号三五頁の註1を参照)

● 認識の一次性・二次性

最後に認識の発展を調べてみることにする。はじめの二年目頃までは、対象操作の過程で認識が行なわれている。それは対象を視聽覚的にとらえるが、触覚運動的あるいは全身運動的に、つまりふれてみてはじめて理解し、全身運動量に関係づけての理解である。それは量感・温感・圧感・運動量などの運動(動作)に密着した複合的感受性に訴えた対象識別である。

一方、子どもの対象活動の事実を拾ってみる(第一表及び四項参照)と、そこには事物の部分が細分化している。しかし、これは前にも述べたように一つのまとまった全体の中での意味はもっていない。いいかえると、部分は単位として認識されている。このことは人々の行動模倣の初期的現象(四、の書字の事例など)も同様の解釈が成り立つように思う。それは行動の一部分が全体の中(行動の秩序)に正しく位置づけられていないからであると考ええる。

この頃、積木の構築の初期的現象として、人の構築作業をみて、それを一度自分でこわして後、もう一度人に積むように要求するかあるいは自分で積んでみることをする。これに解釈を試みると、一

つの単位を、他のもう一つの単位の上に重ねると新しい単位ができることに驚き―新発見―をもつ。この新発見に対して、それを確かめるように自分でこわしてみるのはなからうか。そうして、もう一度単位と単位の接合―構築による新しい単位の構成を試めたいように思われる。この行動は科学的、実証的態度であると同時に全体と部分の関係を知る契機になると考える。これは単位と集合に対する理解にもつながるものではなからうか。その他(前(四)に述べた触覚的数量理解とともに、きわめて低次の数量についての認識がみられる。これらは認識が高度な分析・比較・総合へ発展する糸口であると考える。

要するに、一次的には主観的感受性による対象の特性理解であり、二次的にはやや高度な分析と総合へ進む兆候をみせる。これらの経験によって事物についての表象を貯えている。

ところが、三年目頃になると、いままでも二次的であった部分的理解がアソビのなかでの対象利用に活躍し思考活動の高まりとともに関係的理解(四の部分的識別と分類能力の兆候の項で詳しく述べた)が発展をみせている。それは事物の機能的・因果関係の利用のなかにみられる。

このことは、対象理解が視覚化していることも意味する。つまり、それ以前の直接接触経験でえた表象の活用である。と同時に機能・因果関係理解は低次ではあるが、思考が科学性へ進みつつあることを意味する。この対象理解の視覚化と思考性は、認識が客観化して

つあるものと考ええる。

またこの頃、色彩・形態などの美しさに對するセンスをあらわす、これも対象理解の視覚化の一現象であるとともに、それは芸術性（主観性）へ發展するものと考ええる。

一方、色・形の名称を覚えるという新しい傾向もみられる。これも視覚の対象理解であるとともに、きわめて低次ではあるが、知覚がヨリ高度な客観性への傾向を不すものであると考える。以上が思想的利用期にみられる認識の内容である。

ここで少し認識と思考の關係を考えてみることにする。この頃の色名はまだ固有の事物に密着しており、固有名詞的である。色の認識は充分客観化していない。それは認識の高度化へのはじめは、つねに思考の具体性が關係しているからであると考ええる。このような状態にある色の認識に対し形の名称はヨリ早く客観化するように思われる。それは色彩認識は視覚的であるのに対し、形態認識は接觸的な認識が可能であるためと考える。このことは、対象活動の全体系のなかで、まず技能が認識に對して一次性をとっていることと同様に、幼児の思考が具体的次元において行なわれることを意味すると考える。しかし、この色・形の名称への関心は対象の象徴的利用、コトバの習得の急速な進歩とともに抽象的思考能力の活動を意味すると考える。また形態よりもヨリ抽象的な色名への関心は、きわめて低次ではあるが、思考の一般化への契機であると考ええる。このように認識は思考の發展と密着して發展している。

つまり、具体的思考から抽象的思考へ、さらに一般化という思考の發展過程のなかで、認識は發展する。またつねにヨリ高度な認識へのはじめには具体的思考形態のなかで行なわれる。行動模倣がモデルの行動の秩序のないものから秩序を学びとる過程のなかにも、このことがあてはまると考える。

それは、あたかも技能習得過程が第二表一の過程をつねにくりかえしつつ高度化するのと同様な現象である。

またこれらの過程で思考自体も高まっていることは、四項で述べた多くの事例によって立証される。

ここで、元にもどり思想的利用期の認識の發展過程をみると、それは以前に貯えた表象を活用し、視覚的に、また思想的に對象を理解し、全体として認識は客観化の傾向を強くあらわす。しかも一次的には自己のもつ表象を高次なものにしながら科学性と芸術性をみせ、二次的にはヨリ高度な認識への兆候をみせはじめている。

次に認識自体の發展の全過程をもう一度ふりかえってみることによつて、その法則性をさぐり出したい。

それは最初知覚運動的認識であり、次いでその高度化と思想的認識へ進んでいる。ここに認識一般の發展の法則性がひそんでいてと考える。つまり、『認識は主観的感性的認識を基礎にし、その豊かな感性的認識を支えられながら思考とコトバを媒介として客観的理性的認識へ發展する。しかもその過程で感性的認識自体をも高め

● 対象活動の認識と技能の関係

先きに認識と技能はともに感覚に基礎をおいた主体の運動の内外面の二側面の結果であり、またそれは対象活動の二側面でもあるというが、以上のことからそれが立証されると思う。

つまり、感覚・知覚と動作は結びついて対象活動となる。(結びつための条件はいろいろあるが)

技能が技術への転化過程(発展)にみる意識性とは、対象自体の認識及びそれと自己の活動との関係認識を意味する。そこには思考が働かなければならない。

また認識は行動と思考を伴っていることは前にも述べた。その行動とは対象活動であり、またある種の行動は技能である。

したがって、幼児前期の場合技能は感覚を基礎に思考を媒介としたより行動的な対象活動であり、認識は感覚を基礎に行動を媒介としたより思考的な対象活動である。つまり、認識と技能は分かちたい対象活動の二側面である」ともいえるように思う。

しかも、それらは相互に更新させながら、蓄積されていくのであって、認識と技能は対象活動によってえた無形の財産である。

それは活動の対象の豊富性・多様性と対象活動の過程で働く意識性によって発展している。しかも、その意識性はコトバによって高められる。それらは活動の主体の内部条件と外部条件に規定されながら、その相互作用によって発展する。と同時に主体と外部をも変化させていく。

要するに、幼児前期の対象活動は一生物である人間が他を引きはなして、環境世界と自己を科学性と芸術性において変化発展させながら、主体性を確立する基礎的手段であると考えられる。また対象活動によってえた認識と技能—無形の財産—の実践によって文化をつくり出していく。

雑感

○ フレーベルの恩物創案の主旨が、教材の系統性などの点できわめて進歩的であったことに改めて敬意をもった。

○ 私の絵画製作について以前からもっていた研究と、継続的に結びついた。

○ 現代の乳幼児の集団教育の一般的組織と方法について、幾つかの課題をなげかけられた。

\* \* \*

前号34頁下段13行「幼児から」を「乳児から」、38頁上段16行「保右の」を「固有の」に訂正します。